

本節の報告を行うにあたり、まずは執筆の機会をえていただいた旧（財）大阪府埋蔵文化財協会の関係諸氏に感謝申し上げたい。また、資料の整理と執筆の過程では、筆者の現在の勤務先である岡山大学埋蔵文化財調査研究センターの諸兄をはじめ多くの方々のご援助、ご協力を賜わった。とりわけ以下の諸氏には数々のご助言、ご教示をいただいた。お名前を記して感謝の意に代えたい。

阿部芳郎、稻田孝司、井上智博、駒井正明、富権孝志、難波紀子、平井 勝、藤原好二、松木武彦、松本哲郎（敬称略、五十音順）

註

- 1) 一覧表、実測図中では石材、器種の名称を略号を用いて表示している。略号と実際の名称の対応は以下の通りである。

石材 An 安山岩、Ch チャート、Rh 流紋岩、Sc 結晶片岩
器種 Kn ナイフ形石器、Pt 尖頭器、TPT 有茎尖頭器、AH 石鏃、Sc スクレイパー、TSc 石匙、PE 梗形石器、RF 加工痕のある剝片、UF 使用痕のある剝片 Fl 剥片、Cr 石核、Pbt 碓石器(便宜的に叩石、凹石等を総称)、SR 石庖丁

なお、石器の実測図は、折損部に短い実線の復元線を付した。発掘時など後世の破損による剝離面は空白で、想定復元線を破線で示している。
- 2) 御堂島正 1991「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』第92号
- 3) 下村晴文・菅原章太・橋本正幸 1987「神並道路II」東大阪市教育委員会・（財）東大阪市文化財協会
- 4) 満口町教育委員会 1989「長山馬籠遺跡—県主要地方道倉吉～江府・満口線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一」
田中英司 1979「風早遺跡」（庄和町風早遺跡調査会）
- 5) 近藤義郎・宇垣国雅 編 1983「後現谷岩陰遺跡」（岡山県川上町教育委員会）

第3節 検出した神社・池跡遺構

長滝・安松両遺跡の調査では池および神社境内域の範囲を検出した。陸軍明野飛行学校佐野分校の飛行場（以後「旧飛行場」）建設により池堤や蟻通神社（以後「神社」）境内域内は削平・整地され構築物の遺存検出はない。ここでは明治年間（明治20年頃）に作成の「日根郡長瀧村切図」・「日根郡佐野村切図」（以後「切図」：法務局所管）をもとに作成した日根郡長瀧村水利図・日根郡佐野村水利図（以後「水利図」）を使用し、部分的ではあるがその範囲の特定を試みた。

旧蟻通神社跡（第218図、付図2）

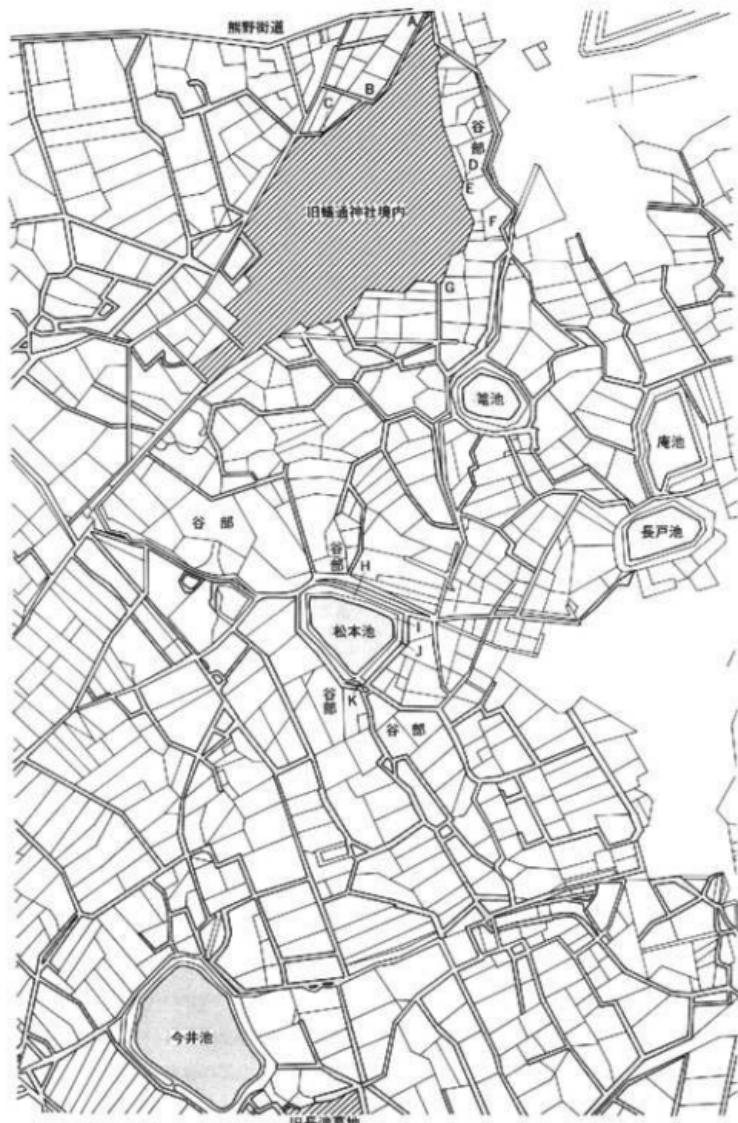
明治年間の「水利図」と検出遺構の対比を試みた。調査では長滝遺跡と安松遺跡との間（現泉佐野市葵町交差点付近）から南東側に谷部と舌状を示す無遺構部分が認められる。無遺構部分は中位段丘面内の丘陵状に突出する先端部で「神社」境内域がのる。「旧飛行場」建設により大きく削平を受け、南東部にもその削平範囲は広がる。

「神社」先端部南西側は208-O Sが境内域を画する。Aは熊野街道側溝である223-O Sに接するが、105区中央は攪乱部分にあたる。Bは75区208-O Sと210-O Sの分岐部にあたる。210-O Sは溝肩部疊積みの堅固な水路である。Cは75区208-O S中央北寄りの屈曲部水溜め部分にあたる。水溜め部分下層より瓦器塊の出土を見ているので、中世段階の境内域を踏襲するものであろう。

北東側は検出遺構と「水利図」水路とは合致しない。A～Dまでは不明瞭である。182-O Sは境内域を画する溝で、「水利図」以前の溝と考えられる。埋土中からは近世陶磁器の出土を見ているので、少なくとも近世段階には存在したであろう。隣接する谷部の埋没と付近の開発の一環として開掘されたと考えられる。E～Fは60・81区の182-O S屈曲部に該当する。Gは46区177-O S北西端部付近であろう。

南西側は「旧飛行場」建設時に完全に削平された結果、対比すべき遺構の検出はない。

「水利図」北側に位置する水路と境内域との間は調査で検出した189-O R谷部にあたる。幾筋もの流路が蛇行して流れ、谷部を形成している。埋土中からは須恵器・瓦器等の遺物が出土しており、中世段階には未だ開発されない地域であったことがうかがえる。谷部埋没後も幾分不安定な状態にあったようで、埋没後の谷部上部には幾筋もの近世自然流路を確認している。この谷部が安定するのは182-O Sの開掘に待たねばならなかったようで、時期的には長滝遺跡で検出した近世流路（水路）包含遺物から見て、18世紀に画期



第218図 日根郡長瀧村水利図

があると考えている。しかし11区検出の186-O Xの中世湧水土坑や189-O Rに包含される瓦器などの遺物の存在を考えると、中世まで遡る可能性がある。本格的な開発は18世紀に待たねばならないが、先駆的な開発は行われていたとみてもよいであろう。また谷部の埋没は流路の地下水脈化を意味し、伏流水をも集めた大きな水道を形成していたと考えられる。その結果谷部から西側の地区にはあまり地下水は供給されなかつたようである。74・105区検出の井戸（野井戸）の密集状況は全ての井戸が同時に存在したものではないが、それを物語るものではないであろうか。

松本池跡（第218図、付図2）

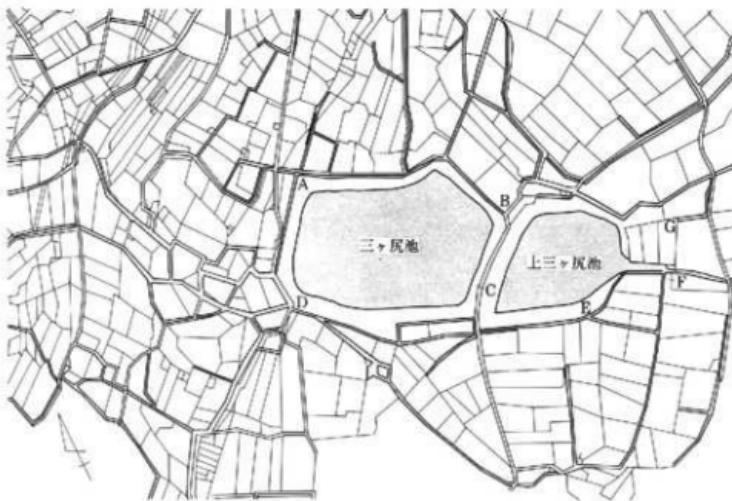
検出した池跡付近は「旧飛行場」建設に伴う削平が著しい。遺構は池底部のみ検出されたが、堤の検出はない。池底の形態や旧長滻墓地跡と「神社」跡との位置関係等や路線内の検出遺構と対比し、121-O Lを松本池跡と特定した。池底と109-O Xを対比して、H～Kの位置を特定した。谷部は109-O Xにあたり、東から蛇行しながら西方向へ向かう。「水利図」に見える地割りは複雑で、明確に谷部を読み取ることは出来なかつた。

三ヶ尻池・上三ヶ尻池跡（第219図・第220図、付図3）

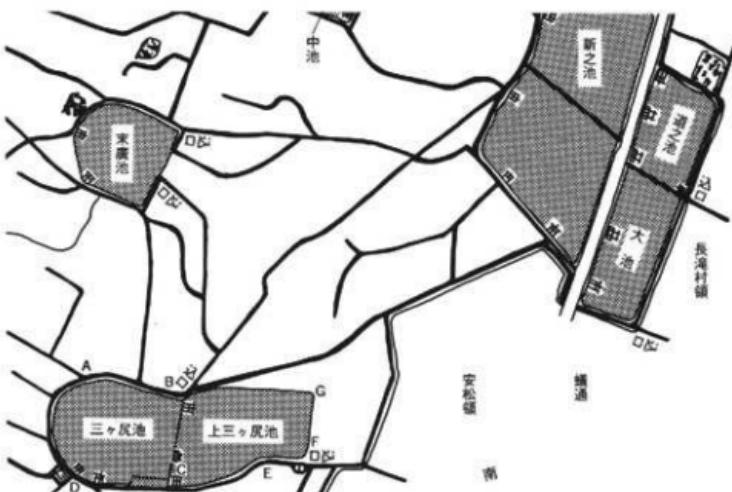
奈加美神社宮司 上田 繁之氏のトレース図「佐野村水利絵図」（以後「絵図」：佐野上善寺所蔵：一部抜粋、改変）と明治年間の「水利図」を使用し、検出遺構との対比を試みた。安松遺跡北西部寄りで検出した190-O L関連遺構は築堤周りの水路・築堤内基部に開掘された鋼溝・堤・樋・上三ヶ尻池との中堤等である。南東から111・112・113・59・54区にわたる広い範囲におよぶ。北西側堤は調査地外で検出していない。

Aは築堤周りの水路230-O S分岐部である。Bは202-O Sの取り付き部で上三ヶ尻池との中堤東端部にあたる。「絵図」では「込口」部にあたる。Cは171-O S取り付き部にあたり、三ヶ尻池への導水「樋」あるいは上三ヶ尻池構築以前の三ヶ尻池「込口」かも知れない。Dは三ヶ尻池の「樋」で、204-O Sの「鋼溝」を切る。このため堤内側の位置はもう少し内側に寄ると思われるがその痕跡は確認されていない。

上三ヶ尻池の範囲は特定しにくい。堤の痕跡は全くない。耕作地に供されていたものを三ヶ尻池への水利機能強化のため40-O R谷部を囲うように浅い築堤をしたものであったものかも知れない。Eは谷部西肩口にあたり、14・20区にかけて東西方向の段をなす。段下の地山直上土層は池底堆積土を利用した耕作土かも知れない。Fは135-O Iが「絵図」の「込口」部関連遺構かも知れない。B～Gにかけては堤の痕跡もなく判然としない。両池は主に40-O R（長滻遺跡では189-O R）谷部の集水機能を有する溜め池である。



第219図 日根郡佐野村水利図



第220図 「佐野村水利絵図」（佐野上善寺所蔵）

（註）奈加美神社宮司上田繁之氏の好意により同氏トレース図を一部抜粋、改変して使用した。
資料は「日根莊総合調査」事務局より提供を受けた。

第7章 安松遺跡における花粉分析

川崎地質株式会社 渡辺正巳

はじめに

本報告は旧財団法人大阪府埋蔵文化財協会が、遺跡周辺で稲作が実施されていたことの確認や、遺跡周辺の自然植生の推定、堆積年代の推定などの目的で、川崎地質株式会社に委託して実施した花粉分析業務の概報である。また安松遺跡は、大阪府南部の泉佐野市に位置する遺跡である。

分析試料について

第1図に示す2地点で試料を採取した。各地点の層相は、第2・3図の左側の柱状図に示すとおりである。

分析方法および分析結果

川崎地質株式会社(1993)に従って分析を行った。分析結果は、第2・3図の花粉ダイアグラムに示すとおりである。またNo.1地点については、第1表の検出花粉数量表に検出個体数を示した。

No.1地点では、試料中の花粉化石含有量が極めて少なく、花粉ダイアグラム作成のために通常最低数とされる、木本花粉化石総数で100個体の検出ができなかった。このため第2図では、検出された種類を*で示した。No.2地点では、充分な量の花粉化石が検出できたことから、第3図では計数した木本花粉を基數にし、木本花粉、草本花粉について百分率で表した。

また、通常は花粉分析結果をもとに花粉分帯を行うが、No.1地点では花粉の検出数が少ないとから、花粉分帯を行わなかった。No.2地点では充分な量の花粉の検出があったが、



第1図 試料採取地点

試料数が1試料と少ないとから花粉分帶を行わなかった。

一般に花粉の含有が少ない原因には、堆積速度が速い、堆積物の粒度が粗いなどの堆積学的な原因の他、堆積後の酸化還元による花粉の化学的破損などが考えられる。No.1地点での分析試料は褐色を呈していることから、酸化による花粉の化学的破損が花粉の検出されなかつた主な原因であると考えられる。

植生復元（図版207・208）

① No.1 地点

前述のように、柱状で試料を採取したNo.1地点での花粉化石含有数が少なかったために、遺跡周辺での植生変遷、堆積時期の推定とともにできなかつた。

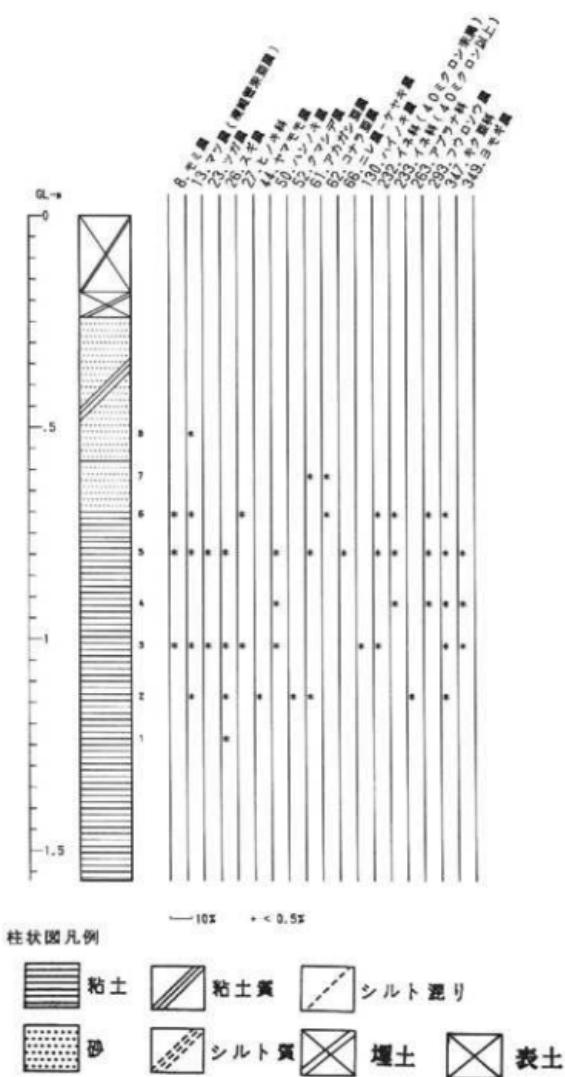
試料No.2では、検出数が少なかつたものの花粉の検出総数に占めるアブラナ科の割合が高い。アブラナ科は、大阪府下の他の遺跡でもしばしば高い出現率を示す。藤田ほか(1991)によれば、大阪府南部地域の多くの遺跡でアブラナ科が高い出現率を示す時期は、およそ16世紀以前である。また藤田ほか(1991)は、全ての例でイネ科(40ミクロン以上)、ソバ属、ワタ属などの栽培種を伴うことから、アブラナ科が栽培種に由来するものだと推定している。

今回のアブラナ科が栽培種に由来するかどうかについては、花粉の検出総数が少ないとから、花粉組成の結果のみで明確な結論を出すことは難しい。しかし、試料No.2の試料採取層準は、

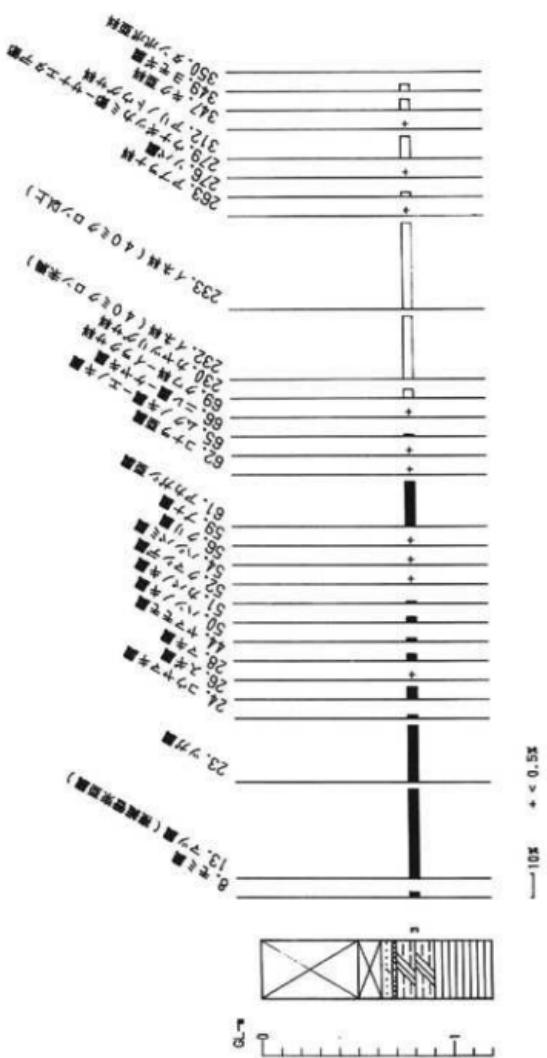
第1表 No.1 地点の花粉数量表

試料No.	1	2	3	4	5	6	7	8
モミ属				1	1	1		
マツ属(復雜管束亞属)	1	4		1	3		1	
ツガ属			1		2			
スギ属	4	1	2		2			
ヒノキ科				1		1		
ヤマモモ属		1						
ハンノキ属			1	1	3			
クマシデ属		1						
アカガシ亞属		1			1		1	
コナラ亞属						1	1	
ニレ属-ケヤキ属					1			
ハイノキ属			1					
イネ科(40ミクロン未満)			2	2	1			
イネ科(40ミクロン以上)				1	4	2		
アブラナ科		18						
フウロソウ属				1	1	1		
キク科	2	5	1	2	1			
ヨモギ属		3	2	1				

数字は検出個体数



第2図 No.1 地点の花粉ダイアグラム



第3図 No.2地点の花粉ダイアグラム

現地での観察より、15世紀頃まで的小規模な開拓谷の埋積物である可能性が考えられている。このため、今回のアブラナ科花粉化石は、タネツケバナのような川辺の湿地などに生育する“雑草”に由来する可能性が高い。

② No.2 地点

現地での調査から試料No.3の試料採取層準には、中世の耕作土の可能性が指摘されていた。一般に耕作上の分析結果では、イネ科（40ミクロン以上）は30～40%程度以上の出現率を示すことが多い。ここでのイネ科（40ミクロン以上）は、36%と比較的高い出現率を示すが、試料採取地点で稲作が行われていたと断定するには、やや低い値である。しかし、この層準内の試料採取地点に近い場所で、稲作が行われていた可能性は高い。さらに、現耕土、試料No.3層準の上下及び水平方向での、イネ科（40ミクロン以上）花粉、イネのプラント・オパールの出現状況を把握することにより、この地点での稲作の有無が明らかになると考えられる。

遺跡付近の田畠の周辺や自然堤防などの乾燥した場所には、ヨモギ属、タンポボア科などの“雑草”が、水田や沼沢地では、アリノトウグサ科やイネ科などの“雑草”が生育していたと考えられる。後背の平野部から丘陵、山地にかけては、アカガシ亞属などを要素とする照葉樹林が分布し、マツ属（複維管束亞属）などを主とする二次林も発達していたと考えられる。また、分析結果ではツガ属が高い出現率を示すが、遺跡の立地条件から、遺跡付近でツガ属が広く分布していたとは考えにくい。ここで検出されたツガ属の花粉は、むしろ遺跡上流部の山地に分布していたツガ属に由来し、運搬・堆積の過程で濃縮されたものの可能性がある。ツガ属の他に、スギ属、モミ属、コウヤマキ属なども低率ながら出現することから、安松遺跡の後背の葛城山地には、これらを要素とする中間温帯林が分布していたと考えられる。

まとめ

安松遺跡で花粉分析を行った結果、当初の目的は十分に達せられなかったものの、以下のことが考察できた。

（1）No.1地点試料No.2では、花粉化石の検出量が少なかったものの、アブラナ科花粉化石が高率で検出された。このアブラナ科花粉化石は、タネツケバナのような“雑草”に由来する可能性がある。

(2) №.2 地点試料№.3 層準では、種作が行われていた可能性が高い。しかし、№.2 地点で行われていたか否かを断定することは、今後の調査に委ねたい。

(3) №.2 地点試料№.3 層準堆積時期の遺跡周辺の植生を推定した。

引用文献

川崎地質株式会社 (1993) 芝ノ垣外遺跡の花粉・珪藻分析 (財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書78

『芝ノ垣外遺跡II』本文編 393-413

藤田恵司・古谷正和・渡辺正巳 (1991) 大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現期について

『日本文化財科学会第8回大会研究要旨集』33-34

第8章 旧長滝墓地遺構から出土した人骨について

大阪市立大学 嶋田武男 安部みき子

旧長滝墓地の遺構から、所属年代は近世から近代にわたるが、そのほとんどは江戸時代に属すと思われる約40体の人骨が出土した。それらは箱または桶の座棺に納められた土葬骨であり、1例を除き保存状態は悪く、歯のみの個体も少なくない。ただし、31区-14-00の遺構からは1体の土葬骨と同時に火葬骨と思われる2体が出土している。これはこの遺構を2次埋葬とした発掘担当者の判断とも一致する。

以下、出土人骨について遺構番号ごとに出土部位を記載し、性別・年齢の推定を行った。なお、性別・年齢の推定は歯の大きさと咬耗度によることが多かったので、その確度は必ずしも高くない。実測図との照合により埋葬方位が推定できる場合はそれについても記した。

一般に保存状態が悪いので、これら人骨の形態的特徴について計測値などを用いて記載することは36区-124-0Uの遺構から出土した人骨を除いて困難であった。そこで、これらの人骨から得られる唯一の有効な情報は死亡年齢の分布であり、その表（第1表）を参考までに付した。

[31区-59-0U]

保存状態：上顎の歯のみが残っており、いずれも銅によると思われる緑色の着色がみられる。残存歯は右の第1または第2大臼歯、第1および第2小白歯、犬歯、左の側切歯および犬歯である。いずれの歯もほとんど咬耗がみられない。側切歯の近遠心径が7.6mm、第1または第2大臼歯の近遠心径と頬舌径がそれぞれ11.3mmおよび13.4mmである。

性別：歯の大きさからみて男性である可能性が極めて高い。

年齢：いずれの歯においても咬耗はほとんど認められないことから、小児ではないとしても20才よりは若いと思われる。

[31区-61-0U]

保存状態：頭蓋では前頭鱗の大部分、右側頭骨の上部および下後部の破片、左右の錐体、

頭蓋冠の小破片が残存している。アステリオン付近の縫合は閉じていない。骨は極めて薄い。その他、下頸骨の頸付近の小片が見いだされる。なお、骨質は極めて劣悪である。頭蓋以外では右大腿骨体の中央から上部にかけてと左大腿骨の上部が残っている。ただし、どちらも殿筋粗面の下部あたりから下のみである。

歯では左上顎の第1大臼歯および右下顎の第2または第3大臼歯が残っているのみである。前者は破損が強く咬耗程度がはっきりしないが、咬頭の形はよく保たれている。後者には咬耗がほとんどみられない。前者の近遠心径および頬舌径はそれぞれ10.9mmおよび11.6mmであり、後者の近遠心径および頬舌径はそれぞれ10.2mmおよび9.5mmである。

性別：歯の大きさからみると、やや男性である可能性が高いが、頭蓋冠の骨が薄い点は女性的である。そこで性別は不明としておく。

年齢：頭蓋冠の骨が極めて薄いこと、歯の咬耗が弱いことからせいぜい20才ぐらいである。

[31区-69-O U]

保存状態：歯のみからなる。咬耗が強く、歯種の同定が難しいが、上顎の右側の第1および第2大臼歯、第1または第2小白歯、犬歯、それに左側の犬歯が残っている。また、右下顎の第1および第2大臼歯とおもわれる歯が残っている。

咬耗は上顎の大臼歯では咬合面が平坦化し、特に上顎の第1大臼歯では象牙質の点状露出がみられる。犬歯、小白歯には象牙質の露出は認められない。上顎の第1大臼歯の頬舌径は12.4mmである。

性別：歯の大きさからみて男性の可能性が大きい。

年齢：咬耗程度からみて30才代であろう。

[31区-70-O U]

保存状態：歯のみが残されている。残存歯種は以下の通りである。

右

左

上顎、…, …, …, …, C, I2, II, II, I2, C, …, …, M2or3, …

下顎、…, …, …, …, C, I2, II, II, I2, …, …, M1, …, …

どの歯も咬耗はほとんど認められない。上顎の左右中切歯の近遠径の平均が8.1mmである。

性別：歯の大きさからみて女性である可能性が高い。

年齢：下顎のM1を除いて咬耗がほとんど認められることから20才未満である。

[31区-72-O U]

保存状態：頭蓋は頭頂骨の破片（複数）、後頭鱗の中央下部の小片、左側頭骨の錐体と下頸窓周辺を含む鱗部の一部、前頭骨の眉間部、下頸の頬などが残っているが、まとまった復元は不可能である。左鎖骨の遠位および近位端が残っている。橈骨と尺骨の体中央部の一部が見いだされる。おそらく右側と思われるが、正確な判定は小片のため不能である。その他、左の有頭骨および有鈎骨、左の第2、第4中手骨、右第2中手骨が残っている。左右の大腿骨の体中央部、左脛骨の体上部と右脛骨の体の一部が残っている。なお、それらの周辺の破片は散在するが、まとった復元は不可能である。

性別：大腿骨が太いこと、眉上隆起が強いことから男性と判定される。

年齢：不明である。

埋葬方位：頭蓋が東南に位置し、大腿骨が左右とも東南東から西北西に向いて横たわることから西北西を向いていたと思われる。

[31区-76-O U]

保存状態：歯のみからなり、左上顎の第1、第2、第3大臼歯と中切歯、右下顎の第1大臼歯が残っている。

咬耗は第3大臼歯はもちろん、第2大臼歯においても極めて軽度である。第2大臼歯の頬舌径は12.1mmである。

性別：歯の大きさからみて男性である可能性が大きい。

年齢：第2大臼歯もほとんど咬耗していないことから、せいぜい20才であろう。

[31区-80-O U]

保存状態：歯のみからなる。残存歯種は次の通りである。

右	左
---	---

上顎、…, …, …, …, …, …, …, …, C, …, …, …, …,	
---	--

M3, M2, M1, …, P1, C, …, …, …, …, M1, M2, …	
---	--

どの歯も咬耗は極めて弱く、特に第3大臼歯の咬頭は全く咬耗していない。第2大臼歯の近遠心径の平均が11.8mmである。

性別：歯の大きさからみると、男性である可能性が大きい。

年齢：歯の咬耗程度からみて20才ぐらいであろう。

[31区-82-O U]

保存状態：歯のみからなる。歯冠の1/3が欠損しているので、歯種の決定が困難であるが、上顎の左第1大臼歯とおもわれる歯冠が残っている。咬頭はほぼ平坦になるまで咬耗し、象牙質は点状に露出している。その他、左右および中側の判定が困難な下顎切歯が1本残っている。

性別：不明。

年齢：咬耗程度から30才代と判定しておく。

[31区-84-O U]

保存状態：右大腿骨の小軸子の下から体中央辺りまでの体上部が不完全ながら残っているのみで、他は、大腿骨あるいは脛骨のものと思われる小破片が散在するにすぎない。

性別：大腿骨は一見したところ太く、男性の可能性が大きい。

年齢：不明。

埋葬方位：実測図でみる限りでは、頭蓋は南端に位置し、長骨は南北に配列することから北向きの埋葬位であったであろう。

[31区-85-O U]

保存状態：歯以外では骨頭および大結節を含む左上腕骨の近位部、頭蓋の小破片10数個が残っているのみである。次に歯の保存状態を記す。

右 左

上顎、…, M2, M1, …, …, …, …, …, …, …, …, M1, …, M3

下顎、M3, M2, …, P2, P1, …, I1, …, …, …, …, M2, …

咬耗は第3大臼歯を除く大臼歯に象牙質の点状露出がみられ、特に第1大臼歯では咬合面が平坦化している。また、切歯の切縁には進行した象牙質の露出がみられる。下顎の左右の第2大臼歯の近遠心径および頬舌径の平均はそれぞれ10.8mmおよび9.8mmである。

性別：歯の大きさからみて女性である可能性が大きい。

年齢：歯の咬耗程度からみて20才代後半から30才代前半と推定しておく。

[31区-87-O U]

保存状態：頭蓋とそこに植立していたと思われる歯のみからなる。頭蓋では冠状縫合と矢

状縫合、それに人字縫合の合流点付近を含む頭蓋冠上部が接合復元可能である。ただし、前頭骨では右の眼窓上縁が保存されているが、左の下部は失われている。前頭部の眉間部、外後頭隆起を中心とした後頭鱗の一部、側頭鱗の破片などが残っているが、接合は不能である。また、左右の側頭骨の錐体が残っている。顔面頭蓋では、右上顎の歯槽突起の小白歯部より前部、下顎体の歯槽部が残っている。残存歯は右下顎の第3大臼歯と第1小白歯、左下顎の第2、3大臼歯と第1小白歯からなる。その他、大臼歯のものと思われるが歯種不明な歯の破片が1ないしは2本分残っている。咬耗は第2大臼歯においても象牙質の露出がみられないし、第3大臼歯においては咬耗がほとんどみられない。なお、下顎において左右とも第2小白歯と第1大臼歯の歯槽が閉鎖している。下顎第2大臼歯の近遠心径および頬舌径がそれぞれ10.4mmおよび10.1mmである。

性別：外後頭隆起が弱く、歯の大きさが小さいことから女性であることはほぼ間違いない。

年齢：第3大臼歯が萌出していること、歯の咬耗が軽度なことから20才代と推定される。

ただし、下顎の第2小白歯と第1大臼歯に歯槽閉鎖がみられるところから、それほど若いと思われる所以、20才代後半と推定する。

〔31区-14-OO〕

保存状態：複数の個体からなり、個体ごとに骨質が異なる。保存状態も個体によりまちまちである。そのなかに少なくとも3個体の人骨が区別される。これらは骨質および大きさの点で区別される。

1体は小児の個体を思わせるほど華奢であり、骨質は脆く、かつ、褐色である。しかし、骨端線が閉鎖しているので、成人のものである。これに属すと思われる骨の保存状態を記す。左上腕骨は近位部では骨頭と大結節、遠位部では滑車の内側半分と内側上顆を欠くが、ほぼ全体が保存されている。骨頭部を欠くため全長の正確な測定はできないが、欠損部を推定補完し、その全長と中央最大径を推定すると、それぞれ243mmおよび18.5mmであり、極めて華奢である。左肩甲骨の外側角付近、つまり、関節窓、肩甲棘の外側端の起始部、鳥口突起の起始部を含む部分が残っている。関節窓は極めて小さい。左の鎖骨がほぼ全長にわたり残っているが、中央の幅径が6mmほどで極めて小さく、本当に鎖骨であるのか疑問を抱かせるほどである。左大腿骨は遠位端と大転子を欠く以外は比較的よく保存されている。右の大腿骨は骨頭から体の上1/3あまりが残っている。一見、小児の骨を思わせるほど華奢である。左脛骨は遠位端を欠くがほぼその輪郭を把握できる。これも大腿骨と同

様に非常に華奢である。右の寛骨（寛骨臼と坐骨枝、耳状面および坐骨切痕を含む腸骨翼の後部と寛骨臼に接する腸骨の基底部）と左の寛骨（ほぼ右の寛骨の場合と同じ部分）が残っている。これらは寛骨臼の大きさが上の大腿骨の骨頭に対してやや大きい点が気になるが、骨質の点で似ており、おそらくこの個体に属すと思われる。坐骨切痕の角度からみて女性と判定される。

次に黒変し炭化の形跡のある大腿骨のみからなる個体がある。左右の骨頭と右の体の中央部を構成すると思われる長さ6cmから9cmほどの2個の破片が残っているが、接合復元はできない。また、左の体の中央部が残っている。なお、左右を比較すると、共に炭化の形跡を有するが、左の方があきらかに太いので、これらは異なる個体に属す可能性もある。

その他、左の側頭骨（錐体、乳様突起部およびそれから前方に伸びる側頭鱗の基部）、左の頭頂骨の下後方部、後頭骨鱗（内外後頭隆起、上矢状および横洞溝を含む）が残っている。外後頭隆起の発達は顯著とはいえないが、弱くもない。なお、これらはほぼ一連のものとして復元できる。問題はこの頭骨の所属である。骨質は上記の第1の華奢な個体に似ている。炭化の痕跡はどこにもないので、第2の個体に属することはない。しかし、決して華奢とはいえないで、第1の個体に属さしめるには多少の疑問がある。

その他、骨質の点で第1および第2の個体と異なる右大腿骨の近位部が残っている。その残存部位は骨頭、大、小の転子を含む。また骨質の点でよく似た、おそらくこの個体に属すと思われる左寛骨の恥骨枝の小部分が残っており、骨質からみてこの個体に属すと思われる、ほぼ中央に栄養孔を有する長さ約10cmの右上腕骨体が残っている（なお、骨は白く、表面には条状の亀裂が多数認められることから火葬骨と思われる）。

さらに、中位胸椎の体が残っており、その所属が問題であるが、炭化の痕跡はなく、骨質は第1の華奢な個体に似ているので、仮に第1の個体のものとしておく。

性別：

- 1) 第1の個体：華奢であることから女性であると推定される。もし、保存状態の項で述べたように寛骨がこの個体に属しているならば、女性であることは確実である。
- 2) 第2の個体：性別判定のための資料が不足であるが、大腿骨の太さからみて、男性である可能性が高い。
- 3) 第3の個体：性別判定のための資料が不足であるが、大腿骨および上腕骨の太さからみて女性である可能性が高い。

年齢：

- 1) 第1の個体：寛骨に“lipping”のような老化に伴う変化がみられていないので、老人でないことは確かであるが、それ以上のことは言えない。
- 2) 第2の個体：不明。
- 3) 第3の個体：不明。

[31区-90-O U]

保存状態：左大腿骨の体中央が全長の約1/3ほど残っている。それ以外の部位は残っていない。

性別：残された大腿骨体は非常に太く男性であることはほぼ間違いない。

年齢：不明。

[31区-95-O U]

保存状態：頭蓋部では歯のみが残っている。それらを記号で示すと次のようになる。

右 左

上顎、…, M2, …, P2, P1, C, …, …, …, …, …, …, …, …, …,

下顎、…, …, M1, P2, P1, …, …, …, …, …, P2, …, M2, …

咬耗は第1大臼歯を除きほとんど認められない。下顎の第1大臼歯の近遠心径および頬舌径はそれぞれ11.2mmおよび10.4mmであり、第2大臼歯の近遠心径および頬舌径はそれぞれ11.1mmおよび10.3mmである。なお、歯にも骨と同様に炭化の痕跡がある。

左大腿骨の体の上半が不完全ながら残っている。その他、大腿骨、脛骨あるいは腓骨の破片が見いだされる。これらは炭化・変形しており、火葬骨の可能性がある。

性別：性別判定の手がかりは歯の大きさ以外にないが、それによるとどちらともいい難い。

年齢：第2大臼歯は象牙質の点状露出がみられるが、それ以外の歯の咬耗は軽度であり、特に第3大臼歯の咬耗面はよく保存されているので、20才ぐらいと推定される。

[36区-98-O U]

保存状態：前頭骨鱗部の左の一部と頬骨突起、左側頭骨の錐体の内耳孔の周辺、頭頂骨や後頭骨の骨片、左右上顎骨の口蓋突起と歯槽突起、下顎骨の体が残存している。上下の顎骨は噛み合った状態で出土し、歯は植立の状態で保存されている。歯質の保存状態はよくないが、右上顎第3大臼歯と左右下顎第3大臼歯と左下顎犬歯を除き、とにかく残存して

いる。しかし、右上顎第3大臼歯の歯槽があるので、この歯は萌出していたと思われる。
残存歯を記号で示すと次のようになる。

右 左

上顎、…, M2, M1, P2, P1, C, I2, II, II, I2, C, P1, P2, M1, M2, M3

下顎、…, M2, M1, P2, P1, C, I2, II, II, I2, …, P1, P2, M1, M2, …

頭蓋以外では右寛骨耳状面の前端から弓状線周辺、左大腿骨骨幹の後面は粗線中央より膝窩面まで、前面は転子間線より遠位約1/3までが残存している。

性別：他の歯に較べエナメル質までよく保存されていた左第3大臼歯の近遠心径および頬舌径がそれぞれ9.8mmおよび11.2mmであり、男性と推定される。

年齢：左上顎第3大臼歯の萌出が未完成なこと、第2大臼歯はほとんど摩耗していないことから、18才前後と推定される。

埋葬方位：頭骨は南東の隅に位置し、西を向く。

〔36区-99-O U〕

保存状態：資料は歯のみからなる。右上顎側切歯、第2大臼歯、左上顎第2小臼歯、右下顎中切歯が欠損している。左右上下不明の第3大臼歯はエナメル質のみが2個出土しているが、咬耗がないことから萌出していたかどうかは不明である。残存歯を記号で示すと次のようになる。

右 左

上顎、…, …, M1, P2, P1, C, …, II, II, I2, C, P1, …, M1, M2, …

下顎、…, M2, M1, P2, P1, C, I2, II, …, I2, …, P1, P2, M1, M2, M3

右下顎第1大臼歯の近遠心径は11.7mm、頬舌径は10.3mmである。第3大臼歯以外の歯の咬耗も軽度である。

性別：歯の計測値から男性と推定される。

年齢：上記の歯の咬耗度から18才前後と推定される。

〔36区-100-O U〕

保存状態：上顎の歯は全て残存している。下顎では左右の中切歯と右側切歯の欠損が見られる。第3大臼歯はエナメル質のみ残存しており、左右不明である。咬耗がないことから

萌出していたかどうかは不明である。残存歯を記号で示すと次のようになる。

右 左

上顎、M3, M2, M1, P2, P1, C, I2, I1, I1, I2, C, P1, P2, M1, M2, M3

下顎、M3, M2, M1, P2, P1, C, I2, C, P1, P2, M1, M2, ...

右下顎第1大臼歯の計測値は近遠心径11.8mm、頬舌径は10.6mmである。第3大臼歯に咬耗が見られず、他の歯の咬耗も軽度である。

性別：歯の計測値から男性と推定される。

年齢：第3大臼歯の咬耗が見られず、他の歯の咬耗も軽度なことから18才前後と推定される。

[36区-102-O U]

保存状態：後頭骨、左右側頭骨の錐体、左右頭頂骨の冠状縫合周辺が残存している。実測図では下頸骨らしい骨が認められるが資料としては残存しない。その他、実測図では、部位不明の長骨が多数認められるが資料としては残存しない。これは資料の保存状態が不良であったためと思われる。

性別：不明。

年齢：不明。

[36区-103-O U]

保存状態：歯種不明の歯の一部が残っている。咬耗はない。その他、右大腿骨骨幹の中央約1/2、右脛骨骨幹内側が残っているのみである。

性別：不明。

年齢：不明。

[36区-104-O U]

保存状態：上顎の右第2大臼歯、左中、側切歯と第1小臼歯、下顎の右の犬歯、第1小臼歯、第1、2大臼歯、左の第1、第2大臼歯が残存している。他に大臼歯の破片が1個ある。右下顎第1大臼歯の計測値は近遠心径が11.2mm、頬舌径が10.5mmである。上顎犬歯の咬頭が咬耗し、象牙質がのぞく。左右の下顎第1大臼歯の咬耗はほとんど見られないが、

第2大臼歯の咬耗は大きく、各咬頭のエナメル質は咬耗し象牙質が露出している。

性別：歯の計測値から推定すると、女性である可能性が高い。

年齢：咬耗の程度は歯種によって不規則であり、判定が困難である。

[36区-105-O U]

保存状態：資料は大臼歯の歯冠の破片のみからなり、計測は出来ない。咬耗の痕跡はみられるが、歯冠全体は出土していないので、年齢の推定には使えない。実測図には長骨があるが、保存不良のため廃棄されたと思われる。

性別：不明。

年齢：不明。

[36区-106-O U]

保存状態：頬蓋冠の破片多数が見いだされるが、復元は不可能である。右上顎犬歯、左下顎第1小白歯が残存している。いずれも歯冠のみであり、咬耗はほとんど認められない。右上顎犬歯の近遠心径は9.0mmである。その他、環椎の右外側塊が見いだされる。実測図では数個の長骨が認められるが、資料としては存在しない。

性別：不明。

年齢：咬耗がないことから15才までと推定される。

[36区-107-O U]

保存状態：左右不明の側頭骨錐体の一部が残存している。歯は比較的よく保存されており、上顎の左第1、2小白歯と下顎の右側切歯と左右犬歯、右第1小白歯を除き残存している。左下顎第3大臼歯はエナメル質のみ残存しているが、咬頭の摩耗はみられず、未萌出であったと推察される。残存歯を記号で示すと次のようになる。その他、上下左右不明な第3大臼歯のエナメル質の一部が残存している。

右 左

上顎、…,M2,M1,P2,P1,C,I2,II,II,I2,C,…,…,M1,M2,…

下顎、…,M2,M1,P2,…,…,II,II,I2,…,P1,P2,M1,M2,M3

左上顎第2大臼歯の計測値は近遠心径10.4mm、頬舌径11.8mmであり、右下顎第1大臼歯の計測値は近遠心径11.6mm、頬舌径11.0mmである。出土した歯に咬耗はほとんど見られない。

性別：計測値から推定すると、男性である。

年齢：第2大臼歯に咬耗がみられず、第3大臼歯が萌出していないことから、12才前後と推定される。

〔36区-108-O U〕

保存状態：頭蓋冠では右の側頭骨と頭頂骨をほぼ完全に復元できた。左側頭骨の錐体と左頭頂骨は上部約1/2が復元できた。前頭骨では左右の頸骨突起部が残存し、後頭骨では鱗部の上部約1/3復元できた。下頸骨では左右の下頸角の周辺、左下頸骨体の前半が残っている。そこに残された歯槽では切歯の歯根のみが開放し、あとは閉鎖している。歯では上下左右不明な切歯1本が残っている。その他にも顔面骨が見いだされるがすべて破片である。

体幹では環椎の左右外側塊、軸椎の歯突起と椎体、頸椎の椎体2個、腰椎1個、肋骨の破片と思われる骨片が残っている。その他、右寛骨の耳状面から寛骨臼の上部約1/2まで、左大坐骨切痕周辺、左右不明の大腿骨体の小転子より下部の約5cmが残っている。耳状面付近には顕著な妊娠痕がみられる。

性別：大坐骨切痕の形状と妊娠痕の存在から女性であることは間違いない。しかも、妊娠痕が深いことから複数回の妊娠を経験している（五十嵐、1992）。

年齢：下頸の大歯以下歯槽が閉鎖していることから老人である可能性が高い。

〔36区-109-O U〕

保存状態：頭頂骨の骨片、左前頭骨眼窩上縁付近とそれに続く頸骨突起、左側頭骨の頸骨突起の基部、左右下頸体と右下頸枝の下部1/2が残存している。歯はすべて脱落し、しかも歯槽は閉鎖していた。右上腕骨体の遠位約1/3と左右不明の脛骨体の一部が残存している。

性別：不明。

年齢：老人。

埋葬方位：頭骨は西端の中央に位置し、長骨は東西に横たわる傾向があるので、東を向いていたと思われる。

〔36区-110-O U〕

保存状態：実測図では多数の歯が認められるが、資料としては右上顎第3大臼歯の歯冠部のみが残存している。その近遠心径は8.9mm、頬舌径は11.9mmである。

性別：歯の計測値からみて、かなりの確度で男性と推定される。

年齢：第3大臼歯の咬耗の痕が見られないので、20才前後と推定される。

[36区-111-O U]

保存状態：頭蓋は左上項線付近の後頭骨、左側頭骨の鼓室部を中心にして乳様突起の基部、錐体、下頸窩および頬骨突起の基部、側頭線の後部を含む鱗部の下部からなる部分、右側頭骨の錐体、鼓室部の一部、乳様突起の基部からなる部分が比較的まとまったブロックとして残っている他は後頭骨、側頭骨、頬頂骨のものと思われる骨片がいくつかあるのみで、全体的復元は不可能である。顎面は上顎および下顎の歯槽の臼歯部の一部が残っているのみであるが、そこに植立していた歯は大臼歯を中心によく残っている。以下に残存歯を記号で示す。

右 左

上顎、M3, M2, M1, P2, P1, C, …, …, …, …, P2, M1, M2, M3

下顎、…, M2, M1, P2, P1, C, …, …, …, C, …, P2, M1, M2, …

M1、M2の咬耗は象牙質の点状露出に留まっている。

その他、右の上腕骨は骨頭、大小の結節などは欠損しているが、それ以下の体のはば3/5が残っている。左大腿骨と思われる骨の体中央部の小片（複数）が存在する。なお、上腕骨の中央周（推定）が71mmである。

性別：上項線および乳突上隆線の発達が極めて良いこと、上腕骨の中央周の値が大きいことから男性と判定される。

年齢：M1、M2の咬耗が象牙質の点状露出に留まっていることから20才代と判定される。
埋葬方位：頭蓋が南西に位置し、長骨が南南西から北北東の方向に向かって横たわることからほぼ北向きに埋葬されていたと思われる。

註：上の頭骨に植立していた歯の他に「4-36区、18-O U (111-O U)、90.7.24. (水洗)」とラベルされたプラスチック小箱入りの9本の歯と「4-36区、18-O U (111-O U)、90.7.25. (棺底)」とラベルされたビニール袋入りの一群の歯が見いだされる。

「4-36区、18-O U (111-O U)、90.7.24. (水洗)」とラベルされたプラスチック小箱の歯には次のようなものがある。上顎では左の第2小臼歯、下顎では右の第1および

第3大臼歯（前者は咬合面中央の溝が消えているのに対して後者は咬頭パターンの退化はみられないが、咬耗がまったくみられないで、それぞれ第1および第3とした）、左右の第1および第2小白歯、左右の犬歯。これらは植立歯群と歯種がかさなるので、同一個体のものとは考えられない。第3大臼歯の咬耗が全く認められることから20才代前半である可能性が高い。下顎の犬歯の近遠心径の平均が7.2mm、上顎の第2小白歯の頬舌径が9.2mmであることから男性である可能性がやや高いが、性別は不明としておく。

同様に「4-36区、18-O U (111-O U)、90.7.25. (棺底)」とラベルされた1群の歯がある。銅によると思われる緑の着色がある。これらは上顎に限られ、右の第3大臼歯が見いだされない他は、すべて存在している。咬耗は第1大臼歯に軽度の咬耗がみられる以外はほとんど咬耗を認めないので、若年者である。なお、当然のことであるが、前の2者とは別の個体に属している。上顎の左右の第2小白歯の頬舌径の平均は10.1mm、上顎の左右の犬歯の近遠心径の平均は9.1mmである。これらの値から判断すると男性である可能性が高い。

[36区-112-O U]

保存状態：歯以外は、頭蓋冠の破片、側頭骨錐体の破片などを残すのみである。ただし、上顎の右中切歯および左側切歯、上下左右の第3大臼歯を除き全歯が保存されている。残存歯を記号で示すと次のようにになる。

右 左

上顎、…, M2, M1, P2, P1, C, I2, …, II, …, C, P1, P2, M1, M2, …

下顎、…, M2, M1, P2, P1, C, I2, II, …, C, P1, P2, M1, M2, …

なお、これらのうち小白歯あるいは犬歯などの歯根は閉鎖していない。

その他、上顎では左右の第2乳臼歯、左右不明の第1乳臼歯が残存しており、下顎では左右の第1、第2乳臼歯が残存している。また、上下左右の確定は困難であるが、乳臼歯と思われる1本の歯が見いだされる。乳歯を除いて、これらにはほとんど咬耗が認められない。上顎の中切歯の近遠心径が8.1mm、上顎の左右犬歯の近遠心径および頬舌径の平均がそれぞれ8.2mmおよび8.3mm、上顎の左右の第1大臼歯の頬舌径が11.1mm、下顎の左右の第2大臼歯の近遠心径の平均が11.3mmである。

性別：歯の大きさからみると、女性である可能性がやや高いという程度であり、不明とすべきであろう。

年齢：いわゆる混合歯列の状態にあり、その状況により8才ぐらいと推定される。これは頭蓋冠の破片が非常に薄いこととも符合する。

[36区-113-O U]

保存状態：頭蓋の冠部では前頭骨と左側頭骨がよく残っている。前頭骨は右下外方が欠ける以外は残っているし、左側頭骨は錐体、乳様突起などの岩様部と外耳道はほぼ完全であり、それに続く鱗部の基部も残っている。その他に左頭頂骨の下部、左側頭骨の錐体、後頭骨の外後頭隆起付近および大後頭孔の後半と後頭顆を含む底部などが比較的まとまった部分として残っている。その他にも多數の破片が存在するが、復元は不可能である。一方、顎面部では下頬骨が関節突起が失われている他はほぼ完全に残っている。歯もそこに植立したままよく保存されている。上顎は歯槽・口蓋部がほぼ完全に残っており、そこに植立された歯もよく保存されている。その他、左右の眼窩外側部が残っている。残存歯を記号で示すと次のようになる。

右 左

上顎、…,M2,M1,P2,P1,C,I2,I1,I1,…,C,P1,P2,M1,M2,…

下顎、M3,M2,M1,P2,P1,C,…,I1,I1,I2,C,P1,P2,M1,M2,M3

左右の上顎のM3は歯槽が失われているので、有無の判定はできないが、その他の欠損歯は歯根が健在なことから存在していたと思われる。M2に僅かな咬耗がある他はほとんど咬耗がみられない。また、下顎のM3は左右ともに未萌出である。左右の上顎の中切歯の近遠径と頬舌径の平均がそれぞれ7.7mmと6.5mmであり、左右の下顎のM2の近遠径と頬舌径の平均がそれぞれ10.9mmと10.4mmである。

体幹では環椎の左右の外側塊と軸椎の体と歯突起、上関節面、胸骨の柄と思われる破片などが残っている。上肢では右肩甲骨の棘突起前縁付近、右上腕骨の大結節および小結節の一部を含む体の上3/5～4/5の前半部とこれにほぼ接続する骨頭の一部、これとは接続不能な体下部の一部（長さ8cmほどの破片）、左上腕骨体の中央部（三角筋粗面付近）とその周辺のものと思われる破片数個が残っている。下肢では右寛骨の恥骨上枝、右寛骨臼の後部（坐骨部）とそれを支持する坐骨体、右大腿骨の内側顆から外側顆にかけての関節面後部の一部と下半の後部を欠く体の大部分、右膝蓋骨の外側半が残っている。右脛骨は遠位端と近位関節面および脛骨粗面を含む上前部分を欠くが、ほぼ全長にわたって残っている。また、左右の判定はできないが、脛骨の内側顆または外側顆の小破片が残っている。

その他、距骨の滑車の一部と思われる破片が残っている。

性別：頭蓋、四肢骨ともに極めて華奢であること、歯が小さいことから女性であることはほぼ間違いない。

年齢：歯の咬耗がほとんどみられず、下顎のM3が左右とも未萌出であることから、若年者と考えられ、せいぜい20才ぐらいであろう。

埋葬方位：頭蓋は北東に位置する。しかし、右上腕骨および右大腿骨などが右（東）側に位置し、北北東から南南西に向かって横たわることから、頭蓋は埋葬時には北に位置したが、上体が前に傾くことにより東に移動したと考えられる。そこで、埋葬時には北向きであったであろう。

[36区-114-O U]

保存状態：上顎では左犬歯が、下顎では左第1切歯、右第2小白歯、歯冠部の保存が悪く左右の判定は出来ないが、大臼歯3本、切歯の歯冠の破片数片が残存している。エナメル質のみが出土し、咬頭の保存状態が悪かったため、歯の計測と咬耗の観察は出来なかった。

性別：不明。

年齢：不明。

[36区-116-O U]

保存状態：上顎犬歯と下顎第1小白歯のエナメル質のみ残存している。これら2歯とも咬頭のエナメル質は軽度に咬耗しているので、象牙質はわずかに露出していたと思われる。

下顎第1小白歯の計測値は近遠心径が6.8mm、頬舌径が7.4mmである。

性別：歯の計測値より女性と推定される。

年齢：咬耗度からみて20才ぐらいと推定される。少なくとも30才を越えることはないだろう。

[36区-326-O O]

保存状態：右上顎第1大臼歯、左下顎の第2側切歯と第1小白歯、左右上下不明の小白歯、下顎の第1または第2大臼歯各1本が残存している。歯は歯冠部のみが出土し、計測部位が破損していたので、計測できなかった。咬耗度は第1大臼歯、第2大臼歯ともに軽度である。

性別：不明。

年齢：咬耗度より、20才代の前半と推定される。

[36区-118-O U]

保存状態：右側頭骨錐体の内耳孔周辺と後頭骨の左外側部が残存している。その他に部位不明な頭蓋冠の破片が見いだされる。上下の歯槽はなく、歯のみ咬合した状態ではとんどの歯が出土している。左上顎第2大臼歯はそれから脱落しており、また、右第3大臼歯の萌出は不明である。しっかりと咬合した状態で固定されているので、脱落した左上顎の第2大臼歯以外は計測不能である。左上顎第2大臼歯の近遠心径は10.3mm、頬舌径は11.1mmである。この第2大臼歯には咬耗は認められない。

性別：歯の大きさからみて男性である可能性が高い。

年齢：上顎第3大臼歯は左右とも萌出しているが、第2大臼歯に咬耗が見られないことから18才前後と推定される。

埋葬方位：実測図によると頭骨は中央よりやや北東に位置し、南を向く。長骨の配置もこれと矛盾しない。

[36区-123-O U]

保存状態：ほぼ完全な前頭骨と左右の頭頂骨が残存している。右側頭骨は鱗部の前方一部を除いて残っている。その他、左側頭骨の錐体、後頭骨鱗部の一部が残存している。顔面骨は見いだされないが、切歯または犬歯のエナメル質の破片と小白歯のエナメル質と大臼歯はすべて残っている。残存歯を記号で示すと次のようになる。

右 左

上顎、M3, M2, M1, P2, P1, …, …, …, …, P1, P2, M1, M2, M3

下顎、M3, M2, M1, P2, P1, …, …, …, …, P1, P2, M1, M2, M3

歯のエナメル質の保存状態が悪く、左上顎第1大臼歯のみが計測できた。計測値は近遠心径10.1mm、頬舌径11.3mmである。歯の咬耗度は、全体的に軽度であり、第2小白歯などでわずかに象牙質の露出がみられるのみである。

右尺骨の骨体上部1/2、左桡骨の骨体上部1/2、それに右大腿骨の骨体中央部、右脛骨の近位から骨体下部1/3（近位の外側部欠損）、左脛骨の骨体2/3が残っている。

性別：歯の計測値より、男性と推定される。

年齢：歯の咬耗度から、20才代前半と推定される。

埋葬方位：実測図によると頭骨は棺の南西端に位置し、長骨も南南西から北北東を向き、ほぼ平行に配置されているので、北あるいは北北東を向いていたと思われる。

[36区-124-O U]

保存状態：この遺体は他の遺体と較べ例外的によく保存されており、頭蓋骨、体幹骨、四肢骨にわたり、ほぼ完全に保存されている。

頭蓋部では、頭蓋冠のうち右頭頂骨の大部分およびこれに接続する前頭骨の大部分と後頭鱗と側頭鱗の一部が欠けている。その他は左蝶形骨大翼の上部が欠けるのみであり、連結復元が可能である。特に側頭骨は右側頭鱗の一部が欠けるのみで左右とも完全に保存されている。状況からみて、これらの欠落部分も本来は残存していたものが何らかの理由で失われたものと思われる。頭蓋底部も大後頭孔の左側、蝶形骨の体が欠損している他はほぼ残っている。特に右蝶形骨はよく残っており、下部では上顎骨および口蓋骨と、上部では頬骨と連結復元できる。卵円孔、正円孔、視神経管は左右とも残存している。上顎骨は蝶形骨と同様に右側がよく残っており、頬骨と連結復元が可能である。これは蝶形骨とともに連結され、右眼窩では下眼窓裂を完全なかたちで認めることができる。ただし、前頭突起は失われ、眼窩の輪郭を完全に把握することはできない。左側では上顎骨は歯槽部と梨状孔の下外側部のみが残存している。頬骨は前頭骨の頬骨突起と連結可能なかたちではほぼ完全に残っている。左右の鼻骨の上部が左右の上顎骨の前頭突起に挟まれて残っている。下顎骨はほぼ完全に保存されている。この資料はこの遺跡出土の頭蓋のうち最も保存の良いものであるが、下顎骨を除けば、計測可能な主径は頭最大長（=177mm）のみである。歯は植立状態で残っている。残存歯を記号で示すと次のようになる。

右 左

上顎、…, M2, M1, P2, P1, C, …, …, I2, C, P1, P2, …, M2, …

下顎、M3, M2, M1, P2, P1, C, …, …, C, P1, P2, …, …

ただし、歯槽からみて上顎の右I1およびI2、左のM1およびM2は存在していたと思われる。また、右のI1と左のM3は歯槽閉鎖している。同じく下顎では切歯はすべて存在していたと思われる。また、左のM2以下は完全に歯槽閉鎖し、M3はおそらく存在したと思われるが、歯周病によると思われる歯槽の変形拡大がみられる。なお、ここには歯石らしきものが残っていた。右の下顎大臼歛の歯槽にも歯周病によると思われる歯槽の変形拡大がみられる。上顎切歯の切縁には象牙質の前面露出がみられ、上下の右M1の咬合面は平坦化が進み、M2にも象牙質の点状露出がみられる。下顎のCの頬舌径が8.2mm、下顎のM1とM2の頬舌径がそれぞれ11.7mmと11.6mmである。

体幹、四肢の骨もほとんど保存されている。そこで、欠損部位と特に保存のよい骨のみ

を記すことにする。椎骨では第4胸椎と第3腰椎と仙骨の骨盤に接続する部分が欠損している。また、尾骨は見いだされない。なお、椎体の辺縁に骨増殖がみられ、その程度は3度である。上肢では、左右の上腕骨とも保存良好であるが、解剖頸の辺りが欠けており、全長にわたる復元は不能である。前腕の骨では、尺骨の保存が良好であり、特に左は完全で全長の計測が可能である〔尺骨最大長（1）=232.0mm、前後径（11）=17.2mm、横径（12）=17.1mm〕。右手根骨と第1・4・5中手骨は見いだされない。左手根骨は豆状骨以外は存在している。指の骨は左右不明の基節骨4本と中節骨1本以外は見あたらない。下肢では、左右とも恥骨を欠く寛骨が残っている。大腿骨と腓骨は左右とも骨端の保存が悪く全長にわたる復元是不可能である。脛骨は特に左の保存が良く、完全なかたちで出土している〔脛骨全長（1a）=338.0mm、中央最大径（8）=25.5mm、中央横径（9）=20.2mm〕。足根骨と中足骨は左右とも保存が良く、右舟状骨と左の中間・内側楔状骨を欠くのみである。指の骨は左右不明の基節骨が1本見いだされるのみである。四肢骨では全般に左側の保存が良い。なお、脛骨最大長からピアソンの式で推定した身長は158.9cmである。

性別：寛骨の大坐骨切痕の鋭角的であることから男性と判断される。これは頭蓋の外後頭隆起の発達が良いこと、歯が大きいこと、身長が当時としては大きいことなどの事実とも符合する。

年齢：縫合の閉鎖はみられないこと、椎体の辺縁に骨増殖が見られること、第1大臼歯咬合面の平坦化は進んでいるが、小白歯などには極端な咬耗はみられないこと、上顎の右第3大臼歯と下顎の左第2、3大臼歯の歯槽が閉鎖していること、臼歯部に歯周病によると思われる歯槽拡大がみされることなどから、若いとも老人とも考えられず、40才代と推定しておく。

埋葬方位：埋葬骨の配置を記すと次のようになる。体幹は四角い遺構の東辺に沿って頭を北にして横たわる。また、頭骨は体幹の下に位置する。下肢は右を底側、左側を浅側として、右大腿骨を下方に、左大腿骨を上方に向け開き、膝でM字型に曲げられている。そこで、例えば右足の骨は西北の角に位置する。このように骨の配置は解剖学的な位置関係と矛盾しないが、埋葬時にどのような姿勢をとっていたのかについては確定し難い。

[37区-129-O U]

保存状態：頭蓋については一連のものとして接合復元できる後頭骨鱗部とそれにつづく左

頭頂骨、同じく一連のものとして接合復元できる右側頭骨とラムダ縫合部とそれにつづく頭頂骨後部が残っており、これらはさらにラムダ縫合の一部を介して接合可能である。また、乳様突起部を除く右側頭骨も残存している。その他、頭頂骨のものと思われるいくつかの破片が存在するが、接合不能であった。

129-O Uと名付けられた人骨の中に骨質からみて明らかに異なる個体に属し、主として鼓室部と錐体からなる左右の側頭骨と数片の後頭骨の破片が残存している。そこで、仮に前者を129-O U-aと、後者を129-O U-bと名付けることにする。なお、129-O U-aは後頭部の外後頭隆起および上項線の発達が著しく、さらに、頭蓋冠を構成する骨が厚い。

その他、129-O Uとラベルされた以下の歯が保存されているが、これが129-O U-aと129-O U-bのどちらかに属すのか、あるいは第3の個体に属すのかは不明である。

右 左

上顎、…, …, …, …, …, …, I2, …, II, I2, …, P1, P2, M1, M2, M3

下顎、…, …, …, …, …, II, II, …, …, …, …, …, …

側切歯に象牙質の露出がみられる。第1大臼歯には象牙質の点状露出を伴う咬合面の全面的咬耗がみられるが、第2、3大臼歯にはほとんど咬耗がみられない。上顎の中切歯と側切歯の近遠径がそれぞれ8.5mmと7.0mm（平均）、第1、第2大臼歯の頬舌径がそれぞれ12.6mmと12.5mmであり、歯の大きさからみると男性の可能性が高い。

性別：129-O U-aは上に述べた頭蓋骨の特徴から男性であることはほぼ確実である。

一方、129-O U-bについては性別は不明である。

年齢：129-O U-aについては、後頭骨と側頭骨の間および頭頂骨と側頭骨の間の縫合に閉鎖がみられないので、50才を越える可能性は少ない。もし上記の歯がこれに属すならば、その咬耗状態からみて20才代であろう。129-O U-bについては不明である。

[37区-138-O U]

保存状態：歯のみからなる。残存する歯を記号で示す。

右 左

上顎、…, …, …, …, …, …, II, I2, …, P1, P2, M1, M2, M3

下顎、…, …, …, P1, …, …, II, I2, …, P1, P2, M1, M2, M3

切歯および小白歯の咬耗は象牙質の露出がなく軽度である。第1大臼歯には咬頭における象牙質の点状露出がみられるが、第3大臼歯の咬耗は軽度である。

性別：上顎の中切歯および側切歯の近遠径がそれぞれ9.4mmおよび7.6mmであり、下顎の第1大臼歯の近遠径が12.0mmであり、男性である可能性が高い。

年齢：上記の咬耗状態からみて20才代後半と推定される。

[37区-139-O U]

保存状態：頭蓋以外は見いだされない。その頭蓋も保存状態はよくなく、左の側頭骨の錐体（かなり大きくおそらく男性のものであろう）とそれに続く下頸窩、外耳道の上壁を含む鱗部、後頭骨の後頭隆起の直下の小片、頭頂骨のものとおもわれる小片3個、その他、その部位の同定は困難であるが、おそらく蝶形骨の一部であろうとおもわれる数個の小片が見いだされるのみである。実測図には長骨も記録されているが、資料は頭蓋に限られる。

性別：錐体の大きさから男性である可能性が高い。

年齢：不明。

[37区-150-O U]

保存状態：歯のみからなる。残存する歯を記号で示す。

右 左

上顎、M3, M2, M1, P2, P1, …, I2, …, II, I2, C, P1, P2, …, M2, M3

下顎、M3, M2, M1, P2, P1, …, …, …, …, …, P2, M1, M2, M3

切歯の切縁および第1小白歯に軽度の咬耗がある以外にほとんど咬耗がみられない。

性別：上顎の左右の側切歯の近遠心径の平均が7.5mm、上顎の左の犬歯の近遠心径が8.7mmであり、男性である可能性が非常に高い。

年齢：上記の咬耗状態からみて20才前後と推定される。

[37区-154-O U]

保存状態：歯のみからなる。保存が悪く、歯種を確定できないが、右下顎の第2および第3大臼歯が残っている。それらの近遠心径はそれぞれ11.9mmおよび11.8mmである。咬耗は象牙質の露出はみられず軽度である。

性別：歯の大きさからみると、男性である可能性が高い。

年齢：歯の咬耗の程度からみて20才代前半であろう。

死亡年齢の分布

本遺跡から出土する人骨の保存状態は36区-124-O Uなどを除いてきわめて悪く、出土人骨の形態的特徴の記載は不可能である。しかし、歯の資料は比較的よく保存されており、歯の萌出状態あるいはその咬耗状態などから年齢の推定がある程度可能な場合が多い。そこで、年齢を20才未満、20才代、30才代、40才代、50才代以上に区分し、死亡年齢の分布を調べてみた。なお、歯の大きさからの性別の判定には吉備（1989）の中世・近世の近畿日本人の歯の大きさが、歯の咬耗度からの年齢の推定にはMiles（1963）の表が、それぞれ参照された。

第1表. 死亡年齢の分布

死亡年齢	…20	20-29	30-39	40-49	50…
M	8	8	0	1	0
個体数	F	2	1	0	1
U*	2	2	1	0	1
M	47.1	47.1	0	5.9	0
相対頻度	F	33.3	33.3	16.7	0
%	U	33.3	33.3	16.7	0

* : Uは性別不明

この表をみると、20才未満の死亡の確率が高いことが判る。また、この若年死亡傾向は20才代まで続く。われわれの死亡年齢の推定は歯の咬耗および萌出状態の観察と骨の観察に頼ったが、20才以上の場合の信頼度はともかく、20才未満の判定にはそれほど大きな誤差はないと思われる。しかも、その中で小児の骨は男女各1例と少ない。そこで、かなりの確度をもって、江戸時代は、特に男性において思春期以降の若年死亡率が極端に高かったと主張できる。しかし、その本態については今後の検討が必要である。

参考文献

- Igarashi, Y. (五十嵐由里子), 1992. Pregnancy bony imprint on Japanese pelvis and its relation to pregnancy experience. *人類学雑誌*, 100:311-320.
- 吉備 登, 1989. 齒冠計測値からみた古代近畿・中国地方人の特性. *人類学雑誌*, 48:1-26.
- Miles, A. E. W., 1963, "The dentition in the assessment of individual age in skeletal material", *Dental Anthropology*. (ed. by D. R. Brothwell), Pergamon Press.

参考図版-1

1. 保存状態最良の36区-124-O U遺構出土人骨

本遺跡としては例外的に全身の骨格がほぼ完全に保存されている。

2. 36区-124-O U遺構出土の下顎骨

大臼歯の歯槽部に歯周病によると思われる顕著なピット（矢印）がみられる。

3. 完全な歯槽閉鎖を示す36区-109-O U遺構出土の下顎骨（全体）

このような老人性変化を示す例は本遺跡では珍しい。

4. 完全な歯槽閉鎖を示す36区-109-O U遺構出土の下顎骨（右側拡大）

図版－1



1



2



3

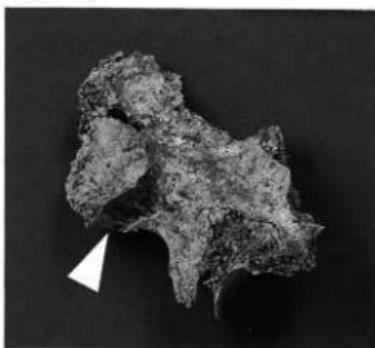


4

参考図版－2

5. 36区-108-〇U遺構出土人骨にみられた虹膜痕（矢印）
6. 36区-14-〇〇遺構から出土した複数個体の人骨のうち、第1の個体に属す左の上腕骨と左右の大腿骨
7. 36区-14-〇〇遺構から出土した複数個体の人骨のうち、第2の個体に属す炭化の形跡のある大転骨
8. 36区-14-〇〇遺構から出土した複数個体の人骨のうち、多数の条痕（矢印）から火葬骨と判断される第3の個体に属す右大腿骨

図版-2



5



6



7



8

第9章 まとめ

ここまで植田池・長滝・安松の3遺跡についてその調査結果を報告してきたが、最終的な調査成果については、空港連絡道路建設の事前調査として実施した11遺跡、延長約6kmについて、別冊として報告が予定されているためここでは報告の最後として、各遺跡について調査結果の概略をまとめておくこととする。

植田池遺跡

当遺跡の立地環境は、現時点では基本的に上位段丘面縁辺付近にあたると考えられているが、調査を実施した40,000m²の大部分については、この理解を肯定する状況であったが、道路建設予定地の南西側、38区から37区にかけて細長く僅かの面積ではあるが、地形が1m余り一段低くなる地域が調査区に掛かっていた。このことから立地は一様ではなく中位段丘面奥部や、上位と中位の段丘を画する段丘崖であると推察している。この段丘崖の付近では、湧水が地点も量も豊富で水を得やすかったことがうかがえる。調査結果からはこの状況を反映してか、上位段丘面では墓地以外にあまり遺構は認められないが、中位段丘面では近世前半頃にはすでに農地として開発されていたことがうかがえる。また、長滝墓地として調査した31・36・37・55区を中心とした地域があるが、この墓地の出現時期は、出土した墓碑から16世紀後半まで遡ることができ、中世以降は墓地が営まれる地理的環境であったことが推察できる。これ以前の状況を知る資料として、この墓域内から墓地に先行する奈良時代前半の瓦窯が検出されており、付近から平安時代前半の藏骨器も出土している。この2例については、植田池遺跡の南に近接して奈良時代後半の創建と推定されている押興寺跡があり、これとの関連が考えられる。

長滝遺跡

この遺跡の立地環境は、現在のところ上位段丘面縁辺部から徐々に段丘中央部へ近づく地域であると考えている。しかし、約60,000m²について調査を実施した結果は、平坦な地形ばかりではなく浅い埋積谷を2カ所で検出し、また、当遺跡の北西端に近い74・75・105区付近では、段丘崖ではないかと考える高さ1m余りの段も検出しており、上位段丘面としても比較的変化のある状況が推察される。前記の2カ所の埋積谷というのは、24から41区へかけてと、81から82区へかけての2条を指しており、これに挟まれた東西方向の幅300～400mの細長い微高地状の地形が当遺跡の約8割を占めていると考えている。次に、

検出遺構についてであるが、47・92・108区を中心とする地域は戦時中の飛行場建設までは旧蟻通神社があったことが知られているが、その痕跡を認めることができないほどこの付近の削平が激しかったことがうかがえる状況である。従って調査結果から直接的な旧蟻通神社の資料は得られなかった。しかし神社の推定地から南側の地域では、古墳時代終末頃からの遺物が比較的豊富に出土し、奈良時代末頃からの遺構も遺存していたことからこの地域の開発の開始時期は、古く遡れそうである。そのことは蟻通神社の起源とも関連して今後の大きな課題であろう。また、41区を中心に半径100mの範囲で旧石器時代の遺物を含む縄文時代の石器・石核・剝片のみが多量に出土しており土器を出土しないこと併せて今後の検討を要する問題である。

安松遺跡

この遺跡の立地環境は、現在のところ上位段丘面中央付近に位置するものと考えられているが、約55,000m²の調査結果から推察されることは、一段下位の中位段丘奥部に立地すると考えられ、この上位段丘と中位段丘の立地の変化地域で長滝遺跡と安松遺跡に分類するのが適切と考えられる。当遺跡では、古い遺物として弥生時代の結晶片岩製石庖丁が2点出土しているが小規模な水田經營であれば可能な地域からの出土である。なお、付近には1～2km程離れて三軒屋、船岡山等の弥生遺跡が知られておりこれらとの関係が今後検討課題となろう。その後の遺構としては、中世中頃まで認められず15世紀代では集落か屋敷の存在を示す掘立柱建物を検出している。中世頃のこの地域付近を熊野古道が通っていた可能性が従来から指摘されており、こうした幹線道路との関連で検討されるべき遺跡となろう。

報告書抄録

ふりがな	うえだいけ ながたき やすまついせき
書名	楨田池・長滝・安松遺跡
副書名	関西国際空港連絡道路建設に伴う発掘調査報告書
卷次	III
シリーズ名	(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書
シリーズ番号	第7集
編著者名	著者: 舟井正男 田中一貴 渡本 武 仁木昭夫 穂部美都里 松岡良康 丸石鳴巳 三宅正浩 山本泰
編集機関	財團法人大阪府文化財調査研究センター
所在地	〒536 大阪市城東区衛生2丁目11番3号 小森ビル4階 TEL 06-934-6651
発行年月日	1996年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 市町村 道路番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		27213	32					
楨田池	大阪府泉佐野市 長滝・日根野	27213	32	34° 22' 55"	135° 19' 40"	89.9 93.3	40,000	道路及び 鉄道建設
長滝	大阪府泉佐野市 長滝	27213	44	34° 23' 10"	135° 19' 35"	同上	60,000	同上
安松	大阪府泉佐野市 安松	27213	43	34° 23' 35"	135° 19' 10"	同上	55,000	同上
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
楨田池	宅地・畠地	中世・近世	井戸・溝・土坑・墓壙・祭祀・建物・池・自然流路	陶磁器・土師器・須恵器・瓦質土器・白土器・瓦・鉄製品・金属製品・石製品				
長滝	宅地・畠地	古代・中世・近世	井戸・溝・土坑・墓壙・池・自然流路	陶磁器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・瓦・弥生土器・石製品・木製品				
安松	宅地・畠地	中世・近世	井戸・溝・土坑・建物・池・自然流路	陶磁器・土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・木製品・金属製品				

植田池・長滝・安松遺跡

関西国際空港連絡道路建設に伴う

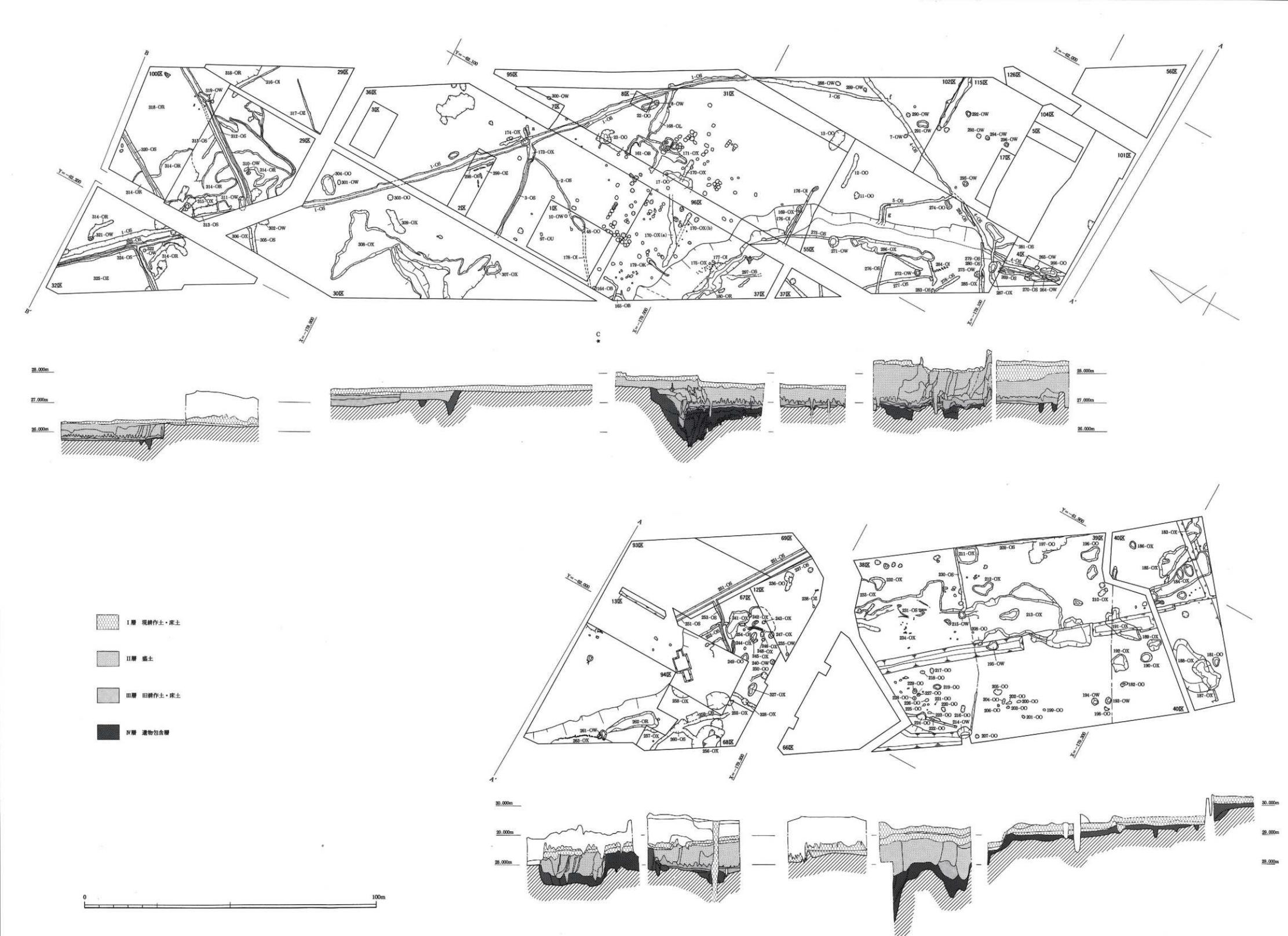
発掘調査報告書 III

—本文編—

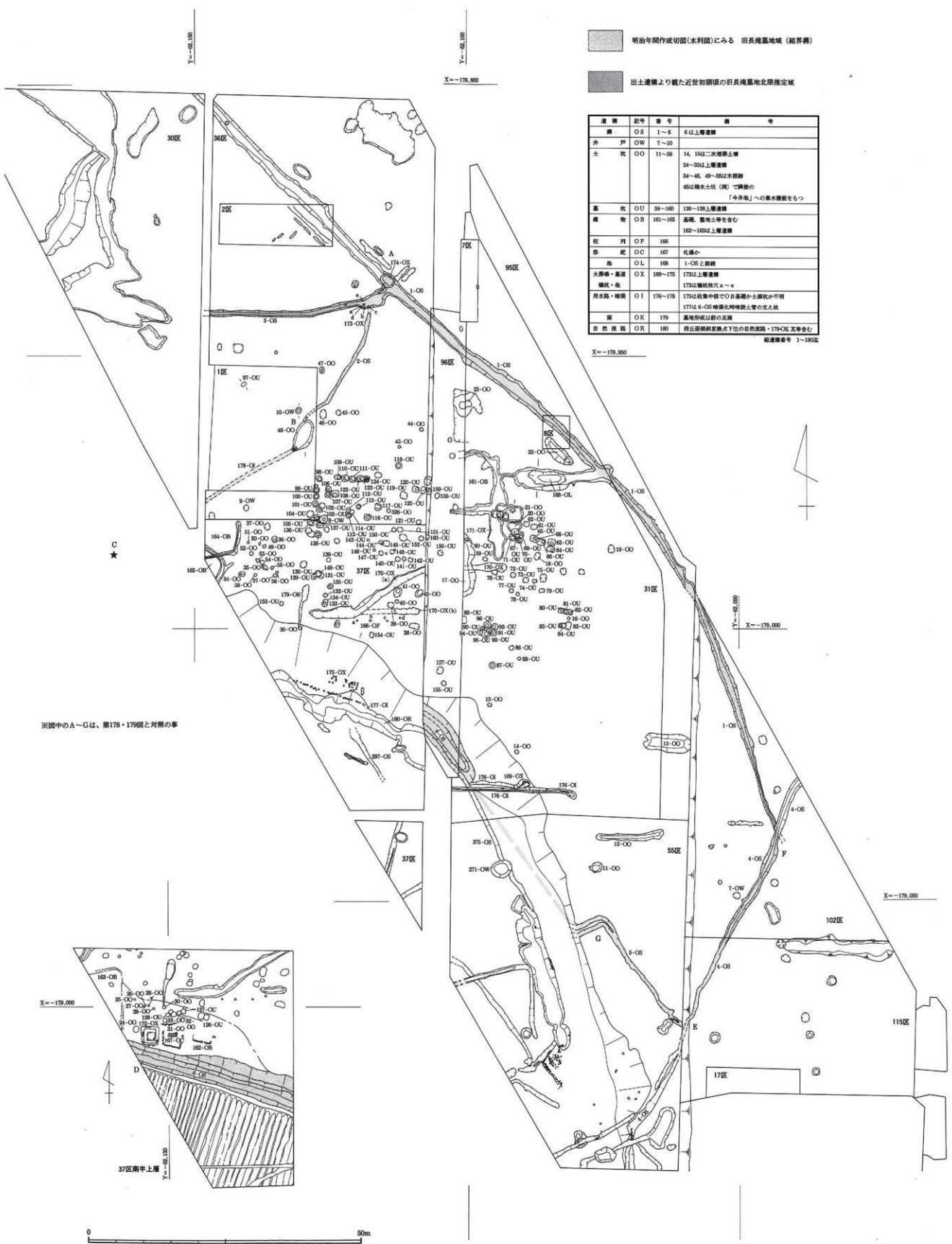
発行 1996年3月31日

発行者 財團法人 大阪府文化財調査研究センター
大阪市城東区蒲生2丁目11番3号
小森ビル4階

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2-6-8



付図1 植田池遺跡遺構配置図 S=1/750



付図4 旧長滻墓地遺構配置図 S=1/500